

南々空知地域ロングステイ型移住ビジョン策定委員会

第1回委員会

議 事 録

開催：平成18年10月25日（水）

## . 概要

---

- 1 . 日 時 平成 18 年 10 月 25 日 ( 水 ) 14 時 ~ 17 時
- 2 . 会 場 由仁町・ゆにガーデン  
住所：由仁町伏見 134 -2 電話：0123 -82 -2001
- 3 . 次 第
- 1 ) 地域視察・概要説明 ( 14 : 00 ~ 15 : 00 )
  - 2 ) 委員会の開会にあたって ( 15 : 00 ~ 15 : 15 )
    - (1) 開会挨拶
    - (2) 委員及び出席者紹介
    - (3) 委員長選出及び挨拶
  - 3 ) 調査の目的・内容・進め方について ( 15 : 15 ~ 15 : 30 )
    - (1) 調査実施計画の説明
    - (2) 質疑応答・意見交換
  - 4 ) 委員会討議 ( 15 : 30 ~ 16 : 50 )
    - (1) 検討課題： 豊かな田園文化とスローライフのまちづくりのあり方  
4 町連携によるエリアマネジメントのあり方
    - (2) 資料説明
    - (3) 意見交換
  - 5 ) 事務連絡等 ( 16 : 50 ~ 17 : 00 )
    - (1) 第 2 回委員会の日程・議題等
    - (2) その他
- 4 . 資 料
- 資料 1 ) 第 1 回委員会出席者名簿・座席表
  - 資料 2 ) 南々空知ナビマップ
  - 資料 3 ) 南々空知地域の概況
  - 資料 4 ) 調査実施計画書
  - 資料 5 ) 「まおいオープン大学」実施概要
  - 資料 6 ) 「スローライフ創出プロジェクト」実施概要
  - 資料 7 ) 第 1 回委員会討議資料

5 . 出席者

区分	氏名	役職等
委員長	小林 英嗣	北海道大学大学院工学研究科 教授 NPO 法人日本都市計画家協会副会長
委員	石森 秀三	北海道大学観光学高等研究センター長 教授
	小池 明夫	北海道旅客鉄道株式会社 代表取締役社長 「住んでみたい北海道」推進会議会長代理
	榛村 純一	財団法人森とむらの会 理事長 美しい景観を創る会メンバー・前掛川市長
	辻井 達一	財団法人日本グランドワーク協会理事長 財団法人北海道環境財団理事長
	林 美香子	フードジャーナリスト スローフード&フェアトレード研究会会長
オブザーバー	三好富士夫	南幌町長
	板谷 利雄	長沼町長
	斎藤 外一 (欠席)	由仁町長
	椿原 紀昭	栗山町長
アドバイザー	(欠席)	内閣官房都市再生本部
	(欠席)	国土交通省住宅局住宅総合整備課住環境整備室
	小町谷信彦	国土交通省北海道開発局事業振興部都市住宅課長
	大山 慎介	北海道知事政策部政策企画担当主幹
	澤田 史志	北海道空知支庁地域振興部地域政策課主査
事務局	嶋田 浩彦	南幌町役場総務課政策推進室長
	山重 明	株式会社ノーザンクロス代表取締役
	今野 亨	専門家プロジェクトチーム・リーダー

## ．地域視察の様

---

### 1．馬追の丘

自衛隊に特別許可をいただき、馬追の丘から南々空知地域全体を眺めました。



バスにて丘の頂上へ。



西方向の景観。



北西方向を眺める。



夕張方面を眺める参加者。

### 2．由仁町優良田園住宅地

バス内より由仁町役場担当者の説明を聞きながら視察しました（写真はありません）。

1．開会挨拶...南幌町長・三好 富士夫 氏

皆さん、きょうは大変ご苦労さまでございました。

それぞれの委員さんをお願いしたところ、快くお引き受けいただきましたことに感謝を申し上げたいと思います。

きょうは、長沼の板谷町長さん、栗山の椿原さんがいますけれども、事務局が私どもだったということで、私の方からごあいさつをさせていただきたいと思います。

ちょうど昨年12月の暮れだと思いますが、移住促進ということで、4町が連携をとり合っている進めていったらどうかという話がございます、それを進めていこうということになりました。そして、ことしに入って1月には、開発局都市住宅課の小町谷課長も来ておりますが、そこが主宰となりまして、うちの町で4町という中でいろいろなことができるのではないかと、それで北国の住まい、まちづくりカレッジ2005 in 南空知を開催していただいて、4町の町長と、本日来ていただきました小林先生と、いろいろまちづくりのお話をさせていただいたところでございます。

その後、新しい年度に入りまして、いろいろな形でこの事業をどういうふうにしていくかということを探索していたところ、全国都市再生モデル調査があるということで、うまくいけばそういうところにも話ができるよということだったものですから、4町の合意もいただいて、手を挙げさせていただいたら、策定しなさいということになりましたので、急遽、委員さんを選考させていただきました。いろいろ、この地域のことをこれから4町の部分で探っていこうということになりました。

この間、ノーザンクロス山重さん、それから今野さんには、この立ち上げに当たって大変お世話になりました。そして、小林先生からいろいろ助言をいただいたことに本当に感謝を申し上げたいと思います。

前段で、この地域をマオイ山、あるいはマオイ丘陵からこの地域を眺めていただいたと思っております。

私は、この4町はこれからいろいろな可能性を秘めていると思っています。交通網、地理的条件、千歳空港に近い、大都市札幌にも近いということから、移住、定住、観光を含めていろいろな取り組みがなされるだろうと思います。4町のそれぞれの町で今取り組んでいる事業もたくさんあります。長沼さんは進んでやっておりますし全国から来ておりますし、栗山さんも古いまちづくりがありますし、由仁町さんは田園住宅と、4町ともいろいろありますので、これらを何とか生かしながら、何かこれからの展開になればありがたいなと思っております。

そんな中でありますので、限られた時間でありましてけれども、来年3月をめどに、それぞれのご意見をいただいて、何とかいい形ができればありがたいなと思っております。これから何回か、皆さんからご意見をいただくかと思いますが、それぞれご意見を出していただいて、また、我々にご指導いただければありがたいと思っております。

今後とも皆さんにお世話になりますけれども、何とかビジョンの立ち上げまでよろしく願い申し上げます、簡単ですが、開会に当たってのごあいさつとさせていただきます。

どうぞよろしくお願いたします。

## 2．委員及び出席者紹介（省略）

## 3．委員長選出（省略）

## 4．委員長挨拶...小林 英嗣 氏（北海道大学大学院工学研究科教授、NPO 法人日本都市計画家協会副会長）

小林でございます。

私は、深くかかわっているというよりも、きょうお忙しいスケジュールを割いてお集まりいただいた委員を皆さん知っているということで、交通整理をせよということだろうと思います。私がかうしましようということをするのではなく、将来、この環境をどういうふうにもうまく使っていけばいいのかということをご皆さんで議論していただければと思います。



それから、ロングスティとか、スローライフとか、スローフードとか、そういうものにふさわしい1時間おくれのスタートとなりましたが、その辺の趣旨をご理解いただければと思います。

## 5．調査の目的・内容・進め方について

小林委員長 それでは、お手元の議事次第を見ていただいて、きょうの趣旨は何かということをご理解していただければと思いますが、調査の目的を簡単にご説明いただいて、これからどんなふうにもモデル調査を進めていくかということについて、事務局の方のたたき台がございますので、それについて若干ご説明いただいた後に、本日、皆さんに地域を回っていただいた感想を含めて、日ごろお考えのことをぜひご発言いただければと思います。

それでは、最初に、調査の進め方や内容について簡単にご説明してください。

### 【調査実施計画の説明（資料4、5、6の説明）】

小林委員長 ありがとうございます。

ご質問をいただきたいと思いますが、まず僕の方から伺わせていただきたいと思いますが。1回目と2回目の間があきますね。何カ月あきますか。

事務局（山重） 約4カ月ほどあります。

小林委員長 そのときに、途中で中間の成果や中間の指針を確認するということが必要だと思えますが、委員会として集まることは難しいとしても、それぞれきちんとお考えを持って、実施されている委員の方がいらっしゃるの、その委員と個別にコンタクトをとられるということも重要だと思えます。その辺はどういうふうにお考えになっていらっしゃいますか。

事務局（山重） ぜひ、そうさせていただければと思っております。

できれば委員会は3回と思っていたのですが、スケジュール等の兼ね合いもありまして、何せお忙しい皆さんですので全員お集まりいただくのは難しい面もあると思えます。したがって、途中の段階で、事務局ベースで、実際に行っている内容についてのご報告と、最終の取りまとめに向けてのご相談のために、随時、お邪魔をさせていただきたいと思っております。

小林委員長 なるべく、2月より前の方がいいような気がします。どうせ忙しいのですから、もっと忙しくするよりいいと思えます。

事務局（山重） そうさせていただきます。

小林委員長 そういうことを前提にしながら、今ご説明していただいたことについて、内容を含めて一遍に理解するのは難しいと思えますが、気になった点がございましたら確認をしていきたいと思えます。

よろしいですか。

（「なし」と発言する者あり）

## 6．委員会討議

小林委員長 それでは、皆さんの日ごろのお考えを伺うのがきょうの趣旨でございますので、進め方や内容については、随時、アドバイスをいただきにうかがうということを前提にしながら委員会を進めていこうと思えます。その辺について、委員会の皆さんにも、事務局にもご理解していただきたいと思えます。

それを前提にしながら、どのような内容で、あるいは、どういう仮説で最後のアウトプットに結びつけていくか、提言に結びつけていくかという現在の段階でのスキームをご説明いただきたいと思えます。

### 【検討課題についての説明】

小林委員長 ありがとうございます。

という幾つかの重要なキーワードを整理しながら、流れと、最後のマネジメント機構等々へのあらあらのシナリオをご説明していただきました。

これにかかわって、いろいろなお立場で主張なさっている方々がきょうお集まりですから、ぜひ内容についてというよりも、今考えようとしていることをさらに広めるという意味でアドバイスをいただければと思います。

それでは、何度も皆さんにご発言をしていただく必要がありますので、まずは榛村委員の方からご発言をいただきたいと思います。スローライフというキーワードも入っておりますし、全体の流れ、それから豊かな田園文化、あるいは豊かなスローライフということに関してもたくさんのお考えをお持ちだろうと思いますので、まず口火を切っていただきたいと思います。

榛村委員 私は、今から4年前にスローライフ運動を始めました。私は、生涯学習運動も日本で最初に始めまして、そのときは住民の人たちに理解してもらうまでに時間がかかりましたけれども、スローライフは半年で全部に広がったのです。それだけ、スローライフというのはみんなが求めているものなのだと思います。



そのときに、いろいろ議論して、スローライフの中身を八つに分解しました。

まず、人間の生活そのものをスローペースにしようということで、歩行文化ですね。歩くことは文化ではないですけれども、自動車に乗るのをやめて歩けば歩行文化だと。

その次に、衣食住は人間の基本ですけれども、衣食住の衣はウエアです。ウエアというのは、織物とか着物を何回も着る、和服を中心としたスローウエアです。

それから、フードはもうご承知のとおりです。

それから、スローハウスです。これは、100年住宅とか200年住宅ということで、日本人はみんな一代一軒で、ローンを払い終わったときに死んでしまうのです。それで、また建て直すということになっています。統計的にいうと、18年で家を建てかえているのです。ですから、それを欧米のように80年から100年に延ばすとスローになります。

その次は、産業も少しゆっくりなものにしよう。スローインダストリーということで、農業と林業が最もスローなインダストリーである。

その次に、スローエイジングです。終生、ゆっくり暮らしていこうという意味です。

それから、子どもを育てることも、早く勉強させて、早くいい学校に入れるということになっていますけれども、それをスローエデュケーションと。大器晩成型ということで、別の言葉に言いかえれば生涯学習です。早く勝負しようというのが学校教育、学歴社会ということではないか。そういう意味で、スローエデュケーションと。

それを全部総合して、八つ目は、スローツーリズムです。グリーンツーリズム、あるいはエコツーリズムということで、人生は旅だ、生活も旅だという意味でスローツーリズムと。

そういうことで、スローという概念を八つに分解したのです。

それは、皆さんに賛同を得まして、去年、スローライフ学会というものができました。スローフードの方は、千九百八十何年かにスローフード協会ができていますが、その概念をもう少し広げたものです。スローライフということは、住民、市民がどう感ずるかということが大事ですか

ら、そういう具体的なものにしないとなかなか浸透しないのではないかと思います。

それからもう一つ、全然別の問題ですが、山重さんに説明をいただいたものは、きれいにまとめられて、このとおりだと思いますけれども、ぎょっとするものがないのではないかと思います。

例えば、住民がどれだけの役割を背負わなければこういうものができないのだという住民の生活革命のようなものとか、住民の生活習慣病をやめるためにこうするのだとか、お客がここへ来てもっと喜んでもらうために住民は何をしなければいけないとか、住民の責任のようなものがちょっと欠けているのではないかと思います。きれいな答案ができたけれども、住民がそれについて知らん顔をしているとなってしまうおそれがあります。

それをもうちょっと絞ると、役場職員ですね。四つの役場があるわけですから、役場職員の責任ということをごどこかに書いておかなければいけないと思います。今、一番幸せな人間は、ちょっと農業をやって、広い屋敷を持っている役場職員だと思います。その幸せをもうちょっと人にも分けてあげる、ここはいい地域だからというように、役場職員のことをちょっと強調しないと、実際に動いていかないのではないかと思います。

もう一つだけつけ加えさせていただきますと、理念というものは大体できていると思います。理念はできているのですけれども、その理念は住民のためである、役場職員のためである、我が地域のためであるというものの結びつきがなかなかつかないのです。なぜつかないかというと、実際の下水をどうするかとか、道路をどうするかとか、子どもの教育、子育てをどうするかという実際の事業と住民の生活と、ここにうたわれているスローライフなり田園文化という理念、理念と住民と実際の事業がリンクするというその仕方がちょっとわからないのです。きれいにまとめられているけれども、人ごとになってしまう計画になりやすいというふうに私は思うのです。

私も28年も市長をやって、そういう傾向がありましたから、余り人のことは言えないのですが、感想だけ申し上げました。

小林委員長 ありがとうございます。

最初から本質的な問題を出していただきまして、感謝いたします。

いろいろなプロジェクトがありますというご説明をいただきましたが、そのプロジェクトと、最後に榛村委員がおっしゃったように、地元の住民、役場、企業、それがどういう責任を持ちながら渡していくのか、そういうことをプロジェクトの中できちんと位置づけてやってほしいということも含めておっしゃっているのだらうと思います。ですから、外から来た人間がわいわいワークショップをやって、お土産などを置いていきましたというものではない、本当に内部からゆっくりと体質改善するといいますか、大きく動かしていくということをプロジェクトの目標にすべきではないかということも含めておっしゃられたのだと思います。



それから、今、スローライフの八つのお話が出まして、最後のまとめとしてツーリズムのお話が出ましたが、石森先生は、北海道にいられてして、急速にあちこちを回られて、しかも、きょうはここにいらっしゃっていただきました。全国の流れ、動きを比較しながら、たくさんの感想あるいはご意見をお持ち

になったのではないかと思いますので、一つお願いしたいと思います。

石森委員 北大の石森でございます。

今回の調査の課題が、ロングスティ型移住ビジョンの策定ということで、実は私も移住してまいりました。関西で60年暮らしておりましたが、還暦を過ぎてから北海道にやって来たということで、まさに移住してきたので、実践者の一人なのですが、これまで半年くらいたった中での感想としては、このまま北海道に暮らしたいなと思っております。

そういう意味で、北の大地というのは、人間をそうさせる要素があると思います。60歳という年のこともあるかもしれませんが、20歳であれば東京の方がいいと思うかもしれません。しかし、現実に2007年問題で団塊の世代が次々と出てきますから、そういう意味では、今回の調査は大変重要だと思いますし、先ほどの内容を伺っても、なかなか重要なポイントが押さえられています。ただ、非常に多岐にわたっていますから、なかなか大変だろうと思いました。

今、小林委員長のご指摘、そして榛村委員が大変重要なご指摘をされました。私は観光学の立場ですから、今、観光の大きな流れが、90年代から観光をめぐる日本で地殻変動が起こっていて、そういう流れが今回の調査でも位置づけられるべきだと思います。一つは、これまでの日本の観光というのは、基本的に団体旅行が中心で、名所見物の中身であり、もう一つの要素は周遊ということです。大きくは三つの要素で、団体旅行、名所見物、周遊、それを旅行会社が演出してきたということになるのですが、それを私は多律型の観光、多律的観光と言っております。それが90年代からニーズが大分変わってきて、団体旅行にかわって個人や夫婦や家族といった小単位で、今は小単位が7割くらいを占めております。2番目の名所見物にかわっては、参加体験、自己実現型の観光です。旅とか観光にかける思いが、十人十色より一人十色のような時代になってきた。

それから、かつては、名所を団体で周遊してできるだけ回る、榛村委員のご指摘でいえばファーストツーリズムだったのです。より数多くの名所を見て回るというものです。それに対して、今は、滞在できるのであれば滞在したい、これはまさに榛村委員ご指摘のスロートーリズムです。

それで、これは私が言い出したことではなくて、女性の研究者が言っているのですけれども、観光という言葉にかわって、「カン」は「感動」の「感」で、「コウ」は「幸福」の「幸」、つまり幸せを感じるということです。光を観る観光はある意味でファーストツーリズムにつながるわけです。できるだけ多くを見て回りたいということですね。それに対して、まさにスロートーリズムにつながる観光というのは、幸せを感じるというものです。幸せを感じずというのは、五感を通して幸せだと思えるような要素が南々空知にどれだけあるか。僕は、この地域のことをまだ十分に知りませんが、自然環境をとらえても非常に安らげる環境があると思います。ただ、滞在型ということになると、北海道だけではなくて、南は沖縄まで、どこでもやっている参加体験型のプログラムで、自己実現を促すようなさまざまなプログラムを用意できているところが成功していています。

そういう意味では、今回の調査の一つのポイントは、榛村委員がご提唱になっているスロートーリズムの場所としてはなかなかいいのではないかと直観的に感じます。また、幸せを感じる滞在型という意味においてもさまざまな要素があるだろうと思います。そのときに、自然の景観というのは物すごく重要な要素だと思います。それにプラスして、事務局でご用意されたものには、

田園文化体験型のロングスティーツーリズム、それが実現可能な要素で、僕は社会資本に対して文化資本と呼んでいます。文化を生み出していくようなさまざまな仕掛けとかシステムとか制度とか、そういうものがこの地域でどれだけうまくつくっていくことができるかということも一つの重要なポイントになると思います。

今、国の国土形成計画でも、ようやく社会資本という概念と、もう一つ文化資本という概念が位置づけられるようになりまして、今回の中でも、ある種、スローツーリズムを実現していくための一つの重要な要素として、文化資本がこの地域でどれだけ整備されているかということも入れていく方がいいのではないかと思います。

小林委員長 ありがとうございます。

文化資本というキーワードをご提案いただきました。それも、ワークショップ、プロジェクトの中でどういうふうに進んでいくかということをご検討いただきたいと思います。多分、事務局の資料というのは、今ご説明いただいたストーリーは山重さんで、プロジェクトは今野さんがお考えになったと思うので、その辺をうまく調整してくださいということだろうと思います。

さて、今、自然とか風土とか、そういう豊かさにつながる基盤のお話が石森委員の方からございました。これは、アメリカばく言うと、夕張川はリバーバレーなのです。そういうところが持っている特徴をどういうふう理解したり再生したり活用したりするのかということがテーマの一つになるのだろうと思いますので、辻井委員に、持っている基盤の豊かさ、あるいは特徴というものをどんなふう理解するのかということも含めて、今のシナリオについてアドバイスをいただければと思います。

辻井委員 最初の調査のシナリオを拝見しましたが、これだけではどこにでも通用する形ではないかと思います。つまり、南々空知地域だけではなくて、これを別の地域で書き直してもどこでも使えるというものではないかと思います。やはり、せつかくですから、南々空知地域の地域特性というベースになるようなものを考えた方がいいのではないかと思います。



それで、きょうもらって見ましたけれども、これはなかなかよくできている地図ですね。これが非常にその特徴をあらわしています。

というのは、マオイ丘陵と呼んでいるものは、3,000年くらい前は完全に島だったわけです。つまり、夕張川沿いのところもそうですし、南幌町、長沼町の平地、今農地になっている部分は、3,000年くらい前までは海だったところですから、マオイ丘陵は島だったわけです。つまり、そのあたりから考えた方がおもしろいのではないかと思います。

そうすると、私が札幌から平野を歩いてマオイ丘陵に行くときは、今、私たちは3,000年前には海の底だったところを歩いているのだ、今急に水位が上がったら我々は溺れるのだという話をよくするのですが、そういうところなわけです。まおいというのは、さっきも今野さんで途中で話していたのですけれども、マオイというのはアイヌ語でハマナスという意味です。マオイ

二でハマナスになるのです。つまり、今でも、この縁にはハマナスがところどころに残っています。つまり、海だった時代の証拠が残っているわけです。海辺だった時代と言った方がいいかもしれませんね。ですから、島として認識してもいいのではないかと思います。

もう一つは、マオイ丘陵も含めて、このあたりの札幌以南のと言うべきでしょうか、北海道の南西部と、ここから夕張岳に向かっての北東部というのは、植物的な意味での境界線になっているのです。昔は海況だったところですから、ただ、海況はそんなに深くなかったわけだし、もう一つは年代的にすごく新しいわけですから、その前に植物は南から北に随分渡っています。ただし、栗山という名前がついているくらいですから、北海道では栗は大体この辺までです。ここから東の方には極めて少なくなります。

それから、トチノキという木がありますけれども、それもほとんどこの辺までです。コナラもそうですし、山椒などもそうですね。山椒もここから先は出てこないのです。そういう意味で、植生の境界線なのだということは一つの特徴として使えるのではないかと思います。

そのあたりから始めて、ここは両方の植栽がまざっているおもしろいところだし、海に浮かんだ島を中心にしたエリアだというふうに説明すると、おもしろがってくれるのではないかと思います。そのあたりから始めたらどうでしょうかということです。

もう一つは、今申し上げたように、今度は平地の方ですけれども、これくらい真っ平らなところはほかにないと思います。標高も高くても20メートル足らずくらいしかないはずですし、本当に真っ平らと言っていいわけです。確かに十勝平野は平らではありますけれども、あれは、もっと標高が高いですし、南へ向かってかなりの傾斜がついています。ところが、ここは本当に真っ平らと言っていいくらいで、しかも、石狩の海岸から苫小牧の海岸までほとんど標高差がありません。それでも、昔は沼がたくさんあったのです。そういった自然の特徴を、例えば2ページにある地域の特性・資源というところに、そのもう一つ手前になるかもしれませんが、そのあたりに書き込んでおいたらいいのではないのでしょうか。それが、このエリアの特徴であるというふうに打ち出してはいかがかと思います。

小林委員長 ありがとうございます。

今お話を伺っていて思い出した本がございます。「デザイン・ウィズ・ネイチャー」という本で、ハーバードの地域デザインの一期生が何かなのですが、きちんと古来からのシナリオがある、そういうものを生かしながら地域開発、都市開発、地域再生をしなければいけないということを書いています。その部分をきちんとやらないと地形を意識したプロジェクトにならないのではないかと、それは一番忘れがちな部分だと思いますので、ぜひ検討しましょう。



さて、小池委員に伺いますが、どこからお話を伺いましょうか。ロングライフのお話でもよろしいですし、北海道全体の観光も含めながらいろいろなシナリオをおつくりになっているので、そのお立場でも結構です。この評価あるいはこの位置づけをなさっていくことを前提にしながら、どんなシナリ

才を考えていくと北海道あるいは地域の競争に参加できるのか、あるいは地域の競争に勝てるのかということも含めてアドバイスをいただければと思います。

小池委員 私は、地域学などは全く勉強したことがないので、おこがましいような感じがいたします。

きょう、ここに道庁の知事政策部の大山さんがおりますが、北海道はこれから人口減少時代を迎える中で、何とか人をふやさなければいけない。北の大地への移住促進戦略会議というものを立ち上げられて、道庁でこれから政策としてやっていきたいということについて、何人が集まって政策案について批評したり、粗いところを少し肉づけしたりして、一つ作業をやらせていただきました。

その延長線上で、それを個々具体的に実行していくのは市町村であります。その後、今度は住んでみたい北海道推進会議というものがつくられました。これは、函館の市長さんが会長なのですが、私は副会長ということで名前を連ねています。それは、61でしょうか、その後、もっとふえているかもしれませんが、道内各地の市町村の方がその会議に参加しておられます。恐らく、この4町さんも入っておられると思います。その中で、今回の標題が南々空知地域ロングスティ型移住ビジョン策定委員会ということですから、まさしく一番本質的なところを市町村として具体的に取り組まれる事柄という気がいたしております。

今回は、調査報告書をつくるのが目的ということで、内閣府の都市再生本部とか、皆さんとか、きょうはそういう方は見えていませんけれども、そういうところから出てきているのは、まちづくり戦略みたいな話だと思います。

私は、札幌に住んで23年くらいになるのですが、札幌市民の立場で見ていると、この中では田園文化となっておりますが、まちづくりというのは、行政がまちという名前だとまちづくりになって、村という名前だと村づくりになるのかなというふうに思ったのですけれども、それと地域的な位置づけの田園というものがどう関連しているのか。確かに、田園地帯の中にまち集落もあるわけです。ですから、農業中心でありますけれども、確かにまちもあるし、商業者もおられるという中で、この辺をどういうふうに考えればいいのかと、私自身はよくわからない部分があります。札幌市民から見た場合の田園という言葉と、この地域から見た場合のまちづくりというものがあるのだらうと、その両方書いてあるのだらうなと思います。

いずれにしても、具体的な施策を打ち出していくということになれば、一番大きな問題意識、問題点の把握から始まると思っています。北の大地への移住促進戦略会議のときも、人口が減る、またはふやさなければいけないということが問題意識だと思いますが、今回は広域連携ということで4町が取り上げられました。この地域の構造的な課題が2ページに出ていますが、この問題認識をきちっと押さえておかないと、何をしようとしているのかよくわからなくなってくると思います。これは既にでき上がっているのですが、その吟味をしっかりとしないといけないと思います。

例えば、農業地帯経営の縮小・撤退と書いていますが、この田園地帯において農業経営は縮小しているのか、あるいは農業者の撤退が進んでいるのか、遊休農地はどんどんふえて耕作放棄地もどんどんふえているのか。私が見ていると、どうもそんな感じがしないのです。非常に豊かな田園地帯が形成されている印象があります。これが、もっと北の幌加内や名寄などに行きますと、

まさしくこういう感じがするのですが、ちょっと違うのかなという印象があります。それから、地域の景観や環境の荒廃とありますけれども、環境の荒廃は起きていないのではないかという気がします。

この辺の構造的な課題をきっちり押さえなければいけないと思います。要するに、これは全国的にどこでも適用されるような話であって、この4町の地域の現状把握から出てくるような豊かな田園文化とスローライフのまちづくりというところに結びついていかないと思います。これは、岡山県のまちであっていいし、どこであっていいという中身になってしまうのではないかというおそれがあります。国がかかわっているような仕事というのは、過去、みんなそうでした、リゾート法のとときもそうでしたし、みんなそういう形になっているのです。結局、後には何も残らない、金太郎あめのようにみんな同じような施策で進められている、地域の特性が全く出ないようになってしまう、そこは注意する必要があるのではないかと考えています。

以上が感想ですが、私の仕事は鉄道業でございます、こちらでは室蘭本線が通っておりますし、グループ会社のJRバスもこの地域でお仕事をさせていただいておりますので、地域の交通という面 このあたりはほとんど位置づけがないのですが、そういうところで私として発言できることがあれば、お手伝いをさせていただきたいと思っております。

小林委員長 ありがとうございます。

最後の社会基盤をどういうふうに考えていくのかということは非常に大きな問題だと思いますし、生活あるいは産業等々を支えるために不可分の議論でございますので、それも含めて検討していただければと思います。

今、2番目におっしゃられた地域の具体的な課題を浮かび上がらせながら議論した方がいいのではないかということは、冒頭に榛村委員がおっしゃった具体的なプロジェクトと申しますが、具体的な事業と申しますが、そのご指摘ともつながることだと思います。このより具体的な課題は何なのか、それはなぜ引き起こされているのか、どういう構造的なところから引き起こされているのかということも含めながら整理をしてくださいということだろうと思います。

そのときにぜひ期待したいのは、今までの行政計画というのは、課題を発見して、とりあえず課題を解決すればいいというもぐらたたきのような状態でずっと進んできていた部分があったと思います。しかし、これから地域間競争で闘っていくためには、地域の課題を解決するという事以上に、その地域がどれだけ魅力を持っているのかということをどんどんつくり上げていくことも必要だと思います。そんなこともあわせて、今の小池委員のお話を私自身はご理解させていただきました。

それから、最初におっしゃられたまちと農村の話につきましては、林委員に伺わなければいけないだろうと思います。それから、スローライフあるいはスローフードということも含めながら、この地域のかなり細かい実態をご存じだろうと思いますので、きょうのご説明についてコメントをいただければと思います。



林委員 たまたま去年、スローフード&フェアトレード研究会としても長沼へ現地視察に行つて、その後に栗山にお邪魔して、また先日も長沼にお邪魔いたしましたので、そこで感じたことも含めてお話ししようと思います。

私自身も、田園観光という言葉にちょっとひっかかるものを感じました。田園ツーリズムがいいのかなど思っていたら、石森委員の方から、観光の違う字を考えたらどうかというお話がありました。例えば、九州の安心院では、歓びが交わると書いて「歓交」という言葉を使っています。その意味では、ここにふさわしい言葉をまず考えていった方がいいのかなと思いました。

それから、先日、スローフードで長沼に行ったときも、実は南々空知のこういう委員になったのですよと話したのですが、農業者の方も農政系の人でも全然知らなかったのがとても残念でした。私は、農村地帯なので、ぜひ農業者の方たちにもこういうすばらしい策定委員会があって、いろいろなことを考えているということを広げていってほしいなと思います。農業者の方たちも非常に頑張っていて、いろいろな動きがありますので、ぜひ農業者の人たちにもこのプロジェクトに入ってもらいたいと思います。

それから、きょうもそうですが、役所主体で行われると、たまたま女性の委員は私一人で、圧倒的に男性が多いのですけれども、グリーンツーリズムなどは、女性が活躍していて、先端で働いているのですね。例えば、長沼の農家民宿が非常に成功しているのは農家のお母さんたちの頑張りなのです。やる気を持って、ますます張り切っているお母さんたちの話も聞きましたので、ぜひ女性の皆さんにどんどん声をかけて、どんどん参加してもらいたいと思います。それは、おばあさん世代からお母さん世代、若い女性まで、いろいろな世代の方たちに入ってもらいたいなと思っています。

それから、きょう、まちの中を少し視察させていただいた中で感じたのは、すばらしい農村景観というものに、もう少し景観に着目したプロジェクトなり考え方が必要なのではないかと思います。

あとは、地域ならではの心配という意味では、去年、栗山にお訪ねしたときに、教育長さんが、札幌に近いということで、子どもたちの教育のことをすごく心配なさっていたのです。というのは、ここに住んでいる人が本当に都会にあこがれて、携帯電話で呼ばれて事故寸前だったというようなことがあるそうなのです。そんな意味で、私は、ロングステイ型移住も大切かもしれませんが、この地域で安心して子どもたちを育てられるようなすばらしい教育ですね。すごくいい環境はあるのですけれども、ぜひ地域の子どもたちにも参加してもらって、ここがすばらしいなと思っているようなワークショップなどがあってもいいのではないかと思います。

あとは、地域の資源という意味では、先ほど山の上から見て、私は運河がすばらしいなと思いました。先ほど辻井委員ともお話をしていたのですが、多分、地域の人にとってもこの運河は物すごく愛着のあるものだと思うのです。長沼の農業者の方たちが、おそばで企業組合を立ち上げているのですが、その名前にまおい運河という会社名をつけているくらいですから、多分、地域の人たちに非常に愛着のあるものだと思います。ですから、地域資源の中にそうしたものも具体的に入れていくと、この地域ならではの考えが入ったいいプランになっていくのではないかと思います。

それから、先ほどプロジェクトの説明を聞いていく中で、もう少し都市の人を意識するのであ

れば、本当にここに来たいなと思っている人たちをうまく取り込んでいかないと、思い込みで、こうに違いないというプランニングになってしまうのではないかと感じました。

たまたま、先日、浜頓別に講演会の仕事で行きましたら、あそこも移住を受け入れていまして、100坪の土地をただでという形でやっていますが、そこに移住してきている方は、一般的には男性の方が農村への移住に熱心で、奥さんはそれほどでもないと言われているのです。ただ、あるご夫妻は、奥さんの方が1年じゅう浜頓別にいて、旦那さんは神戸にいて、時々来ているそうなのです。ですから、これは個別にいろいろなことが考えられると思いますので、ぜひ、このあたりに興味を持っているような方たちにうまく入っていただいて、いろいろな意見を取り込んでいくと、実のあるものになるのではないかと感じました。

私は、ぜひ女性の方の意見をいただきたいということをしつこく言わせていただこうと思います。よろしくお願いいたします。

小林委員長 ありがとうございました。

榛村委員はあと5分で行かなければならないのですが、先ほどのご発言の中にありましたキーワードを少し展開してわかりやすくご説明していただければと思います。

半農半役人が一番楽だというお話がありましたが、その持っている豊かさを人に分けてあげるというお考えは私は非常に大事だと思いますので、そのところも含めてコメントしていただければと思います。

榛村委員 それは、全国のどこでも言われていることですが、一番難しいのです。地域というものを考えるときに、コストダウンをできるものは何と何かということが一つあると思うのです。その一つが合併だったのですが、それはともかくとして、生産性を上げるにはどうするか、コストダウンができないのならどうやって売上増を図るのか、それから、お客をふやすにはどうしたらいいか、あらゆる商売はそういうことだと思います。

今、委員の先生方がおっしゃったことは、みんなそれぞれ大事なことですが、それを自分の問題として考えるということだと思います。役場の職員、農業者が、自分の問題、自分のコストダウン、自分の売上増進、自分の生産性向上にどれだけ役立つかということを考える必要があると思います。きょうは町長さん方もいらっしゃいます。町長さん方も、ここは合併をしなかったようですけれども、何のために合併するのか、何の課題を解決するために合併するのか、課題などを抜きに合併すべきかどうかとやってしまうと、役場の位置をどこにするのかとか、そういう話でだめになってしまうのです。

ですから、もっと具体的に、例えばこの地域で何のブランドをつくるか、産物で何のブランド、暮らし方で何のブランド、地域の名前で何のブランドということで、ブランドをつくるためには4町ばらばらではだめだねと。新しい商品を開発するのと同じで、新しい商品名は合併した方がいいとか、そういうことになると思うのです。

余り品のいい言葉ではないかもしれませんが、我がまちは商品化されているかどうかというサイドで分析してみる必要があると思います。それは、お客さんが来たときに、珍しいお土産があるとか、いろいろ便利なことがあるとか、行くのに便利だとかね。つまり、この南々空知地域は商品化されているかどうかということです。商品化がもうちょっと行かないとだめではないかと

思うのです。

勝手なことを言わせていただいて恐縮ですが、私が自分のまちでやってきたことは、今しかないものは何だというものをつくれと言いました。それから、これしかない、これはうちのまちしかないものですね。今しかない、ここしかない、これしかないという三つを「これしか文化」あるいは「三しか」文化と言ったのです。それが名物だと思うのです。

ですから、人間についても、まちのことについても、生活の仕方についても、お土産についても名物・名産になりますし、ところでいえば名所になります。そういうキャッチフレーズのようなものが意外に大事です。それから、住民、市民や役場の職員が当事者意識を持つということだと思います。

委員長が私に何を言わせようとしたよくわかりませんでした。

小林委員長 前におっしゃっていたおすそ分けの話をちょっとしていただければありがたかったのです。

榛村委員はお時間ですので、どうもありがとうございました。また事務局の方がお邪魔するかと思いますので、よろしくお願いいたします。

小林委員長 さて、一わたり委員の方にお話を伺いました。

きょうは斉藤町長がまだお見えになっておりませんが、3町長いらっしゃいますので、まず椿原町長からお話をいただきたいと思います。



椿原町長 今、5人の方からいろいろなお話を伺いましたが、町の中に住んで見ている目と外から見た目では相当違います。私ももともとは十勝ですが、そういう物の三方は大事だなと思っております。私が思っていたとおり、5人の委員さんから、別の視点でこの4地域を見ていただいたと思っています。歴史的には同じようなまちの形成の歴史があるのですが、100年前後の中では、地理的には同じ条件だけれども、100年の中でまちづくりが行われてきて、それぞれ4町の特徴というか、若干の違いが出てきていると思います。その特色を委員の皆さんの目で見ていただいて、それを出していただくと非常に幸いかなと思っております。

いろいろな面でご期待しておりますので、よろしくお願ひしたいと思います。

小林委員長 ありがとうございます。

それでは、板谷町長からお願いします。

板谷町長 いろいろなご意見をいただきまして、



非常に深く感銘しております。

グリーンツーリズムも、実は昨年から受け入れを開始しているのですが、私自身が驚いたことは、お母さん方が意欲を持ってやってくれたということなのです。呼びかけに強く反応を示していただきまして、去年よりもことし、ことしよりも来年の予約が順調に伸びております。これは、ある意味でうまくリードできたのかなと思います。

さらに、実質的に加盟している153世帯のお母さん方が、非常に意欲を持って対処しているのです。

これはなぜなのかということではいろいろな角度で分析してみましたら、去年見えた150名余りの子どもたちが自分の家に帰った後のアフターが非常にいいのです。例えば、年賀状が来たり、メールが届いたり、お手紙が来たりということで、受け入れたお母さんたちが、自分の子どもがまたふえたという感じを強く持ったということがあるのです。

これをさらに分析すると、初めて来て、初めて泊まったときの印象というのは、以前から住んでいる我々には見えない部分なのです。現に、受け入れた日はちょうど雨が降ってしまっていて、受け入れ農家の方々は、どうしようかな、困ったな、雨降りでも何もしただけで、体験させられないと思っていたのですが、実際に到着されて、荷物を片づけた子どもが、ジーパン姿でいきなり外に出て行って、「ばんざーい」と発声したそうです。これを見て、これが本当に大自然に溶け込む姿かなというふう感じたという話を聞かせていただきました。

先ほど、商品化が非常に下手だというお話を聞かせていただきましたが、我々にはわからない、見えない、我々は非常に鈍感になっているこの景観を商品としてうまくPRする必要があるなとつくづく感じました。

ぜひ、委員の先生方のご貢献をいただいて、行政政策の一つの指針にぜひ取り入れていきたいと思っております。

ありがとうございました。

小林委員長 それでは、三好町長、お願いします。



三好町長 いろいろご意見をいただきまして、本当にありがとうございます。

4首長の中で、私はまだ農家のおやじを振り切れていないのですけれども、この4町は農業が基幹産業となっていて、特に今は食の部分が大事です。私も盛んに叫んでいますが、若い人たち、特に子どもたちにかに伝えていくかということだと思っています。

今、いろいろお話をしているのですが、ここにも「地産地消」と書かれていますけれども、私は「地」の下に括弧書きで「知」という言葉を入れています。まず知ってもらわないとだめだと思っていますし、この地域も、札幌の方にしろ、いろいろな方に来ていただくと、意外と喜んでいただける部分がたくさんあるのです。今、長沼の町長が言われたように、我々がわからないことも、よそから来ていただいた方にいろいろヒントをいただいております。

多分、この地域はもっともっと可能性を秘めていると私も思っていますから、きょう先生方に見ていただいて、そういう意見を出していただいて、先ほど商品化の話もありましたけれども、ぜひ4町のブランド化ということになればいいなと思っています。そういう意味で、行政もいろいろやらなければならない部分がたくさんありますが、最後にはいい答案を書いていただければ私にとっては非常にありがたいと思います。まだまだ隠れた商品が、農業一つとっても物すごくあると思いますので、私は伝える、知っていただくことを中心にやっていきたいと思っています。

そんなことも含めて、これからもよろしくお願い申し上げたいと思います。

山重さん、2回では足りなさそうですね。

先ほど様村委員に2回お話しいただきましたので、最後に、まだいらっしゃる4人の委員から一言ずついただきたいと思います。今までのこと、それから今の3町長のお話を受けて、これだけは加えたいということ、さらに事務局に対する宿題でも結構ですので、ぜひいただきたいと思っています。

林委員からお願いします。

林委員 先ほど半農半役人という言葉が出てきましたけれども、四国の愛媛県松山の内子のまちに行きましたときに、農家民宿をしたところがすばらしかったのです。そこは、内子の元助役さんが開業した農家民宿でした。兼業農家でお家の農家をずっと手伝いながら、退職をする10年くらい前に奥さんがオーナーとなって農家民宿を開いているのですが、そこは、地域の農家の人たちのサロンでもあり、ギャラリーなどをつくっていたり、コンサートも開いたりしてましたし、とてもすてきなところだったのです。その農家民宿に感激をしていたら、実は、役場時代の仲間がいろいろなコミュニティビジネスをやっているのだということで翌日案内をしてもらいました。そうしましたら、鍛冶屋さんの息子さんが、役人をやめた後にまた鍛冶屋さんを開いたり、ずっと幼稚園の園長さんをしていた方がギャラリーを開いたり、またコミュニティのカフェを開いているところが何軒もあって、すばらしいなと思ったのです。

北海道でもそういう地域があったらいいのにと感じていましたら、どこか1カ所、もと助役さんが町長さんがそういうことを始めたところがあると聞いたのですけれども、私は、プロジェクトの4番目に担い手育成プロジェクトというものがありますが、もう何か起こしそうな感じのお役人の方が何人かいると思いますので、ぐっと後押しをして、ぜひコミュニティビジネスをやってもらおうと、地域の人たちにもすごく見えてくるのではないかと思います。こういういいものがありますよ、ありますよと言われても、なかなかプランニングだけだと地元の人たちは「ふーん」で終わってしまいますので、この計画の後に何かすてきなお店ができたりしたらいいなと思いました。

実際、内子には、それだけではなくて、道の駅の「からり」というすばらしい産直の場所があるのです。20年間、「知的農村塾」という名前で役場の方と農業者がずっと勉強していく上で、その成果として「からり」という産直場ができたそうです。

ですから、今回は期間が短いですが、じっくり取り組む面も、この委員会が終わっても地域の人々がすごく考えていくとか、ワークショップを開いていくとか、そういう継続性のようなものができたらいいなと思います。

小林委員長 ありがとうございます。

嶋田さん、コミュニティビジネスで便乗したらいかがでしょうかというアドバイスがありました。

小池委員はいかがですか。

小池委員 先ほどの見学会で既に移住された方が住んでおられるまち並みを見せていただきました。もう具体的にそういうことがどんどん進んでいるということで、もともと札幌均衡にあって位置的に大変いい場所ですから、豊かな田園でのスローライフがこれから一層進んでいけばいいなと思います。

札幌にも近いですから、衛星都市としての住宅開発みたいな話になってしまいますと、これは進むべき方向が違うと思いますので、そこは注意する必要があると思います。

いずれにしても、恵まれた地域ですから、数年後には、新たに入ってくると人を禁止するような条例ができ上がるような地域ではないかと思っています。楽しみにしていますので、私どもがこの委員会でその一部を促進する役割ができれば大変名誉だと思っています。

小林委員長 ありがとうございました。

先ほど辻井委員から、自然、風景、地形等々の話をいただきまして、成り立ちの話はよくわかりました。僕は先週、イングランドとスコットランドに行ってきたのです。こっちはイングランドにすごく近い風景ですね。それで、イギリスのいろいろな風景、地形の活用の仕方は辻井委員は物すごくたくさんご存じだと思うので、そんなことも含めてアドバイスをいただければと思います。

辻井委員 先ほど運河の話がありましたけれども、北海道ではっきり運河と呼んでいるところはそこくらいではないかと思っています。あるいは、日本でも、運河とはっきり呼んでいるところは、たしか北上のところの一つあったかと思っていますけれども、それくらいで、例としては余り出ないのではないかと思います。ここは、馬追運河と南幌のところを通っている幌向運河を今でも運河という名前と呼んでいます。

前に、長沼に来たことがあって、あそこの商工会の青年部の人たちが随分熱心に、もう一遍あそこで船を動かしたいという話をしていまして、ぜひおやりになったらいいのではないですかとおったことがあります。

やはり、例の石狩川放水路にかわる遊水池計画もあるわけですから、あれとうまくつないでいけないものかなと思います。特に南幌は1カ所、遊水池をつくることになっていますし、それといきなりつなぐということはできないとしても、一部でもいいから、関連した仕掛けとしたらおもしろいのではないかと思います。もしできるのなら、幾つかの川筋をつないで、あちこちに行けるような形で、まさにイギリスのナロウ号が走っているような、ああいうことが一部でもできると随分景色が違ってくると思います。

また、新しい交通手段として、しょっちゅう使うものではないかもしれませんが、レジャーには十分なり得ると思います。

さっき申し上げましたが、とにかく平らだというところをうまく使えばいいのではないかと思います。

山の方は、どっちにしても、道は必ず変化に富む景色が見られるのですが、平地の方は、何もしないと、どこにいても同じということで景観としては変化がありませんので、動きもの、つまり、ここでいうと運河をうまく活用するというのはいいと思います。

ですから、そういうポテンシャルのあるものを、まさにこの地図でいいので、これにどんどん落としていって、どこに何があるのかということを見たら全部わかるというポテンシャルマップのようなものをつくってみたらどうでしょうか。それによって、これとこれをつなげるとか、これはうまくやると何かに使えるのではないかというアイデアが出てくるのではないかと思います。

小林委員長 今、河川でも、道路でもやろうとしているのですけれども、例のカルテづくりがありますね。そういうものともつながるのかなと思いました。

今のお話を伺って思ったのですが、日本ウオーキング協会というものがありまして、僕の友達の何人かがそこで頑張っているのですけれども……。

辻井委員 フットパスみたいなものですか。

小林委員長 そうです。フットパスをつくってみたり、既存の資源をどう使いながら文化を体感するかということを中心とするのではないかという気がするのです。

辻井委員 私も好きで、ほとんど毎年のようにイギリスへ行ってフットパスを歩いているのですけれども、決定的な違いがあるのです。日本でも、市内歩道ということでやっています、例えば四国の八十八ヶ所も似たようなものだと思いますが、イギリスのフットパスの場合は、必ず2時間くらい歩くと、パブがあってビールが飲めるのです。あれが日本には欠けているのです。ビールとは言いませんけれども、さっき林委員がおっしゃったように、そば屋があるとか、何かでつなげるといいと思います。

林委員 どぶろくもありますからね。

辻井委員 どうも日本の場合は、歩け歩け運動というような感じで、健康志向というか……。

林委員 楽しさもあればいいですね。

辻井委員 私は、そこまでやる気は毛頭ないのです。もう少し楽しく歩けるようなフットパスができるといいなと思います。

小林委員長 ありがとうございます。

最後に、石森委員からお願いします。

石森委員 ちょっと気になったのは、資料7の7ページですが、広域連携によるエリアマネジメント機関、まおいまちづくり機構といったようなものをつくるべしということだと思います。そういうこともあると思いますが、5ページ目のまちづくり戦略の展開プログラムの一番右手のところに、多様な主体の連携マネジメントの仕組みづくりとあります。私は、北海道で暮らしてまだ6カ月ですが、非常に感じるのは、言われていたとおり、官主導の地域だなということです。今後の北海道がどうなるかということで、北海道の人は、ライフスタイルもすばらしいですし、生きがいを感じておられる道産子がたくさんおられると思います。ただ、何となく、北海道の未来や空知の未来に自分たちが責任を持たねばならないというところにちょっと乖離があるのです。ですから、先ほど辻井委員からイギリスのお話がありましたけれども、決定的な違いは、民がつくってきたものと、北海道は百何十年も官主導でつくられてきた、そういう必然があったわけです。

そういう意味で、7ページのところでは4町連携によるエリアマネジメントとありますが、エリアマネジメント、地域経営という、どうしても官が主体的にならざるを得ません。しかし、5ページあたりは、多様な主体の連携マネジメントの仕組みづくりですから、僕は最終的には民・産・学・官が今回のプロジェクトでどれだけコラボレーションを図られるのかということが大きなポイントだと思います。そういう意味で、5ページと7ページは、7ページは7ページで必然があると思いますが、できれば5ページにある多様な主体の連携マネジメントというものが最終的にきちんと位置づけられる形が望ましいと思います。

小林委員長 ありがとうございます。

たくさんのお話を伺いました。

今、僕は7ページをずっと見ていたのですけれども、今、石森委員がおっしゃったことは、真ん中のタイトルのことも機構のこともそうなのですが、矢印がありますね。この矢印が協力的なのか参加なのか支援なのか投資なのか、それによって全然変わってくると思うのです。例えば、今のコミュニティビジネスのような話、あるいは民の話が北海道でなかなか成立しにくいのは、起業者が銀行から金を借りなければいけない、そうしないとコミュニティビジネスにたどり着かない、そういう話はアメリカ人やヨーロッパ人はおかしいと言うのです。なぜ投資というふうにしにくいのかと。ですから、投資という概念を地域に入れられない限り、地域の起業化、資金アウトした人間の起業化は非常にしにくいと言うわけです。それは、僕ももっともだと思いますので、山重さんが書かれた3ページの社会市場というものを成立させるために、マネジメント機関の中での矢印のかなりの部分を投資という概念、矢印の名前にしていただきたいのです。その作戦が必要なのだと思います。

それから、先ほど榛村委員がおっしゃった住民の意識、あるいはブランド化を志向して、かなりメッセージを強く出そうということで、地域自体のブランド化、あるいは地域の中でブランド化をしたときに、域内収支だけでは絶対に成立しないので、投資という概念を入れながら、それを浮かび上がらせていく、発展させていくということをぜひ考えていただきたいと思いました。

さて、僕がまとめるのではなくて、実は最後に小町谷さんに振ろうと思っています。

ここは、例のまちづくりカレッジの延長の部分もあると僕は理解しています。それで、前回仕掛けたのは小町谷さんですね。きょうのお話を伺いながらいろいろなことを感じになったので

はないかと思しますので、感想でも結構ですけれども、最後に一言いただければと思います。

小町谷課長 私ども開発局では、3年ほど前に、北国の住宅需要ということで、小林先生のご指導のもとに、北海道らしいライフスタイルを実現するための住まいづくり、住環境を提案するというので、幾つかの会議をさせていただきました。

そういったものに基づきまして、道内4カ所ほどで実際に地域の皆様方と行政と民間の方、小林先生のご指導のもとに進めさせていただいたのですけれども、ちょうど2月の会議の中で今回の話のきっかけをつくれたということで、自画自賛になりますが、大変うれしく思っております。

開発局としましても、これからこの会議での検討成果を実現すべく、できるだけご支援をしていきたいと考えておりますので、これからの議論の展開に大変期待しているところでございます。

それから、ちょっと感想めいたことになりましたが、今、国の方では、一昨年に景観法が制定されまして、いろいろな仕組みを議論しております。ただ、実際にそれを支援する手だてがまだ整っておりませんが、来年度に向けての本省への要求ということで、実際に景観形成のためのいろいろな取り組みを行っていく際の支援制度を要求しております。そういったものが整いますと、かなりいろいろ動きやすい形になると思います。先ほど林委員の方からご指摘がありましたけれども、ぜひ広域的な景観形成に向けた議論を活発に行っていただけたらなと思っております。



小林委員長 ありがとうございます。

先ほど冒頭の事業の話というのは、景観法の活用とか、地域再生法の活用とか、もう既に用意されているまちづくり交付金への橋渡しとか、そういうことを念頭に置きながら戦略をつくっていかねばいけないと思います。最後に非常に大事なコメントをいただきまして、ありがとうございました。

今、ちょうどまあいタイムで5時でございますので、終わらせていただこうと思います。

事務局へお返しします。



## 7. 事務連絡等

事務局（山重） どうもありがとうございました。

予想どおり、非常に厳しい宿題をたくさんいただいて、大変感謝しております。

委員会は、本委員会としては2回を予定しておりますが、小林委員長の先ほど来のご発言を聞

いていますと、もうちゃんと議論をさせろというご指示をいただいているように思いますので、  
どういう形で皆さんとディスカッションをする場をつくらせていただくか、場合によっては、多  
くの方は札幌にいらっしゃいますので、札幌で、榛村委員にも来ていただく形を考えつつ、もう  
少しフランクにディスカッションをしていただく番外編を1月くらいに考えたいなと思ってお  
ります。お忙しい方ばかりなので全員集まるかどうかわかりませんが、できるだけ日程も前日に調  
整させていただいて、やわらかく議論をさせていただく場を設けさせていただきたいと思  
います。

本委員会そのものは2月から3月の初めくらいになると思いますけれども、この委員会として  
当地で予定をさせていただきたいと思っておりますが、その間、またいろいろアドバイスやご指  
導をいただくことが多くなると思いますので、よろしくお願いします。

本日は、どうもありがとうございました。